

野菜作経営の経営展開に関する分析から

農業・農村構造プロジェクト センサス分析チーム

野菜の作付経営体数は、2005年の51.6万経営体から2020年には28.3万経営体へと減少しています。とりわけ露地野菜の作付経営体数は、2015年からの5年間で△30.0%もの大幅な減少となりました。こうした状況下での野菜作における担い手の構造変化を捉えるため、露地野菜販売1位及び施設野菜販売1位の経営体を取り上げ、それぞれ分析を行いました。

露地野菜作：一部の品目で大規模化が進展

まず、露地野菜販売1位の経営体についてみると、作付経営体数は2010年以降、販売金額「300万円未満」層での減少が顕著となりました。これは高齢化した小規模農家の離農が急速に進んだためと考えられます。一方、販売金額「3,000万円以上」層では、実数としてはわずかですが、2005年から2020年にかけて経営体数が一貫して増加しています。作付面積も2005年から2020年にかけてほぼ維持されており、これら大規模層の一部で規模拡大が進展していることが推察されます。

そこで、露地栽培が主である根菜類及び葉茎菜類について品目別にみると（表1）、根菜類を中心にほとんどの品目で2015年から2020年にかけて作付面積が減少しています。増加しているのはキャベツ、レタス、ブロッコリーとごく一部です。販売金額規模別には、「300万円未満」層ではいずれの品目も作付面積が減少、「300～3,000万円」層ではブロッコリーを除いて減少、「3,000万円以上」層ではさといもを除き増加となりました。

また、販売金額「3,000万円以上」層に着目して作付面積シェアをみると、さといも、ほうれんそう、ねぎ、ブロッコリーを除き4割以上のシェアを占めています。この規模層で作付面積の増加率、

表1 品目別の作付面積（露地野菜販売1位）

		作付面積 (2020年)	増減率（15-20年）				[3000万円以上]層の 作付面積 シェア (2020年)
			計	300万円 未満	300- 3000万円	3000万円 以上	
根菜類	だいこん	13,239	△13.9	△34.8	△25.5	6.5	49.2
	にんじん	9,068	△13.4	△35.2	△22.5	9.1	41.9
	さといも	2,022	△30.7	△39.2	△26.5	△10.5	13.2
	やまのいも	4,312	△12.3	△38.1	△23.9	10.3	46.9
葉茎 菜類	はくさい	8,366	△1.1	△33.3	△19.1	30.5	53.2
	キャベツ	22,093	1.4	△24.7	△10.7	33.5	40.4
	ほうれんそう	5,713	△21.0	△39.3	△25.3	19.6	29.2
	レタス	13,804	4.2	△22.5	△10.8	32.3	46.4
	ねぎ	8,819	△0.4	△30.8	△7.0	72.1	28.7
	たまねぎ	18,355	△2.5	△17.8	△23.8	29.1	51.5
	ブロッコリー	11,237	30.9	△9.3	21.8	100.1	31.0

資料：農林業センサスの調査票情報から独自に集計。
注1）露地野菜販売金額1位の農業経営体による作付のみを集計したものである。
注2）増減率は+30%以上に、作付面積シェアは40%以上に網掛けした。

シェアともに高いのは、はくさい、キャベツ、レタスであり、これらの品目では作付面積の大規模層への集中が進みつつあると推察されます。

施設野菜作：作付経営体数と面積の減少が併進

次に、施設野菜販売1位の経営体についてみると、2005年から2010年にかけて販売金額「300～3,000万円」の中規模層で作付経営体数の大幅な減少がみられました。近年、減少率は緩和したものの、2010年以降もその傾向は続いています。また、各5年間のハウス・ガラス室の実利用面積増減率は、2005～10年が△4.8%、2010～15年が△10.8%、2015～20年が△15.8%と徐々に減少率が高まる傾向にあり、作付面積も同様に減少しています。このように作付経営体数の減少に伴って、ハウス・ガラス室の実利用面積や作付面積の減少が進んでおり、施設野菜栽培における規模拡大や経営継承の難しさがうかがえます。

さらに品目別の作付面積について、施設でも作付けされる葉茎菜類のほうれんそう、レタス、ねぎ及び果菜類、果実的野菜に着目すると（表2）、2015年からの5年間でレタスでわずかに増加している他は減少しています。減少率が高いのはピーマン、メロン、すいかです。

同じく作付面積を販売金額規模別にみると、「3,000万円未満」層ではすべての品目で減少していますが、「3,000万円以上」層ではレタス、ねぎ、きゅうり、いちご、すいかで増加率が3割を超えています。また、販売金額規模別に作付面積シェアをみると、ほとんどの品目で「300～3,000万円」の中規模層が中心となっています。「3,000万円以上」層でシェアが高いのはレタス、ねぎのみでした。このように施設野菜作では、作付経営体数が減少しつつある中規模層の経営展開が今後も注目されます。

（小柴 有理江）

表2 品目別の作付面積（施設野菜販売1位）

		作付面積 (2020年)	増減率（15-20年）			作付面積シェア（2020年）		
			計	3000万円 以上	計	300万円 未満	300- 3000万円	3000万円 以上
葉茎 菜類 (一部)	ほうれんそう	2,082	△18.5	1.7	100.0	12.3	58.9	28.8
	レタス	393	6.5	42.8	100.0	5.5	49.4	45.1
	ねぎ	844	△1.4	39.1	100.0	6.2	49.3	44.5
果菜類	きゅうり	2,197	△10.6	44.7	100.0	7.4	81.5	11.0
	なす	772	△14.0	27.3	100.0	6.6	84.7	8.7
	トマト	4,746	△9.9	18.8	100.0	6.6	63.1	30.3
	ピーマン	708	△23.9	△3.8	100.0	8.9	72.5	18.6
果実的 野菜	いちご	2,878	△15.9	32.3	100.0	6.4	77.8	15.8
	メロン	1,752	△23.4	3.8	100.0	4.0	70.9	25.0
	すいか	1,010	△23.6	71.8	100.0	5.5	83.3	11.2

資料：農林業センサスの調査票情報から独自に集計。
注1）施設野菜販売金額1位の農業経営体による作付のみを集計したものである。
注2）増減率は+30%以上に、作付面積シェアは40%以上に網掛けした。